大東亞戰爭の教訓[[1]](#footnote-1)

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　香山光郎

　　はしがき

　大東亞戰爭は今や決戰段階に入つたといふ。しかし、米英が飜然前非を悔いて、または力盡きて、わが軍門に降るまでは、どの位時間がかゝるか、神のみぞ知る。

よしんば百年かかつても、所期の目的を達成するまでわれらは戰はねばならない。故に決戰段階だとはいへ、われわれは唯今が戰爭なかば、いな本格的の戰爭の始まりだといふ氣持が必要である。

　戰爭の始まりだからといつて、今までの戰爭より得たところの、教訓を反省するのも無駄なことではないと思ふ。いなむしろ、今までの教訓を一應整理することによつて、明日への準備ともなることだらう。

　余は一庶民である。大東亞戰爭に關しての知識は、新聞やラジオを通してのものであつて、それさへも、歴史家的に蒐集整理したわけでもない。たゞ聞きつぱなし、讀みつぱなしの記憶に過ぎない。これが所謂庶民的認識といふものであらう。余はこの庶民的な認識に基づいて、余自身が受けた、または見た、大東亞戰爭の教訓を記して見たい。

　　國體認識

　大東亞戰爭によつて受けた教訓の中で、もつとも代表的なものは、庶民階級への國體認識の普及深化だと思ふ。日本は神國なり、日本は天つ日嗣のしろしめす國なりといふ信念は、日本人たる者誰もがもつてゐたであらうが、自分といふ個人が、完全に皇國のものであつて、個人生活や、家庭生活や、社會的などすべての職業や活動が、實は國家のためであり、國家のことであり、國家のものであつたんだといふ、切實な體驗は、多くの者は、大東亞戰爭の進行につれて、漸次蓄積、昇華して得られたのだと思ふ。これはいはゆる個人主義、自由主義の一掃といふものであらうが、もともと米英的思想に感染してゐなかつたものも、君民一體、國我一體をしみじみ感じて、それを子孫萬代に傳ふべき、尊くも美しき人生観と確信するに至つたのは、大東亞戰爭のお蔭ではなからうか。

　これは、戰爭遂行のために、國家の諸機關や諸先達によつて教へられた思想や、要求された幾多の實踐によつて、形づくられたものと見られぬこともないが、余は左様にばかり思ひたくはない。むしろ平和時代の、享樂や我儘の心の垢が、禊がれ、祓はれることによつて、日本人の眞の心の姿が現はれたものと見たい。この戰爭は庶民階級としては最初からその戰爭の目的や重大性を見透しての戰爭ではなかつた。だから國家から要求されるいろいろな統制や、犠牲に對して、凡夫的庶民的不平不満を抱いて居つたものもなきにしもあらずであつた。いはば最初はいやいやながら押されて行く輩もあつたのである。しかし、大東亞戰爭が戰はれてから一年有半、庶民は國家と自分との關係をはつきり認識したのである。最初は、戰爭遂行のため、一時的になされるものと思つてゐた、諸統制も、やうやくこれこそ國民生活の正しきあり方であると解るやうになつたのである。

　食糧は國家管理となる。從來の經濟組織では、これは營利のための商品であつた。それで、或營利業者が、食糧を買占めて値段を釣り上げたり、相場の對象にしたり、酒を造らうと、焼き棄てようと、倉庫の中で腐らさうと營利者の勝手であつたのである。これは原始的な形態でなくして、米英的自由主義のやり方であつたこといふまでもない。

日本中で作られる食糧は、日本全體の食糧でなければならぬ。日本は　天皇を戴いた一家族であつて營利を目的[と]する自由な個人の寄合世帶ではない。これこそ日本の國體の世界に冠絶する所以であつて、米英のそれとは、正に對蹠をなすところである。決戦を前にして、個人の給料のために同盟罷業を起し、大統領と上下兩院と泥試合を演ずるやうな國柄とは斷然違ふのである。

日本國民は、同じく大君の赤子であつて、同胞の兄弟であり姉妹であるが故に、如何なる地方で、誰が作つた食糧でも、全部お上に差上げて、頒けていたゞく建前で行くべきあるといふことは、今分つて見れば誠に當然の當然である。どうして、この見易い道理が、今まで隱されてゐたのであらう。それが不思議でならない。それは貪慾によつて、われわれの心眼が暗まされてゐたためであつて、大東亞聖戰の大禊によつて、心の鏡がその本然の光を恢復したものである。

　或はいふであらう。これは必要に迫まられての經濟政策の現はれであつて、決してお前がいふやうな神がゝり的なものではないと。成程、從來の政治、經濟學的物の見方ではさもあらう。しかしその裏に、その奥に、より高き眞理の動きを知らないものゝいふことであつて、正に米英式見方である。米英に於ける食糧の統制は、恐らく必要に迫まられての、政策的統制であつて、それ以上の何者でもないだらう。しかし、日本は違ふと思ふ。違はなくてはならないと思ふ。何となれば、日本の國家を動かすものは、經濟ではなくて、皇道であるからである。この大戰爭の目的が米英では利であるのに、わが日本では皇道顯現であるやうに、同じ食糧の統制でも、米英のそれと日本のそれとは同じであることは出來ない。

　學徒動員體制も同様だ。他の國でやるのは、單に戰爭といふ一時的の必要のためにやることであり、日本に於けるそれは、戰爭完遂のためであると同時に、皇道の顯現に一歩を進めたものである。日本がやることは、大であれ小であれ、政治的なものであれ、經濟的なものであれ、その外観はどうであつても、その底を流れるのは、皇道顯現といふ、國史の大きな歩みでなければならない。

　青年學徒は、大東亞戰爭を機緣として、益々國防や産業を擔當するやうになつたのが、今般の戰時動員體制であつて、國史の歩みの方向から見れば、常にあるべきものが、時機到來して成つたものに過ぎない。

　皇道顯現のため、大東亞戰爭完遂のためには、まだまだなさるべき統制が多くあるであらう。統制といふことばは、その作用から見てのものであるが、その精神から見れば歸正といふべきであらう。當にあるべきところに歸ることであるから。軍人勅諭に見えた國民皆兵が、復古歸正であつたのと變りはない。

　大東亞戰爭を通じて、かゝる歸正的統制が尚擴大さるベきは豫想せられることであるが、これは臨時便法ではなくて、歸正であるが故に、十年や二十年で、元に歸ることはないだらう。若しかゝる統制の續くべき期限を、強いていへとならば、八紘爲宇の完成した日までと答ふるより他に答へやうはないと思ふ。

　　道義的世界觀

　われわれは生まれつき道義を信じ、世の中は道義で行くべきものと感じてゐるのだが、實際は力と物、もつとはつきりいへば、武力と經濟力がものをいふ世界を見せつけられて來た。そして學問に於いても生存競爭といふ、假説を基礎とした生物學はいふまでもなく、政治學にしろ經濟學にしろ、社會學にしろ、いづれも人間世界を力の戰として、物を得んがための爭闘として説明されて來たので、われわれは、生まれつきの信念や、祖先傳來の、忠孝その他道義的世界觀を、修正すべく餘儀なくされたのである。叡智といふのは道義を辨へる心的力であるが、かういふものはいはゆる道學先生たちのいぢる骨董であつて、權諜術數こそ眞に人間に必要な叡智なりと教へた。われわれは文明人となるためには、なるべく完全に、仁義だの、慈悲だのいふ良心のはたらきを根こそぎ除去しなければならなかつた。しかし、この道理を理論を以て、實踐を以てわれわれに強いたのは英米人であつたのである。英米は地球の主人であり、先生であつた。他の諸民族は英米に學び、これに倣ふことを文明開化と見て來たのが、十九世紀より二十世紀の初期にかけての人類世界の有様であつた。

この時にあたつて、帝國は道義の大旆を翳して[[2]](#footnote-2)起き上がつたのである。萬邦その所を得、兆民その堵に安んずる共存共榮の世界の建設を宣言して戰つてゐるのが、今次の大東亞戰爭である。

　ところが、われわれの中でも、果して皆が、道義の世界の出現を戰爭の最初から信じたであらうか。これはよき理想であるが、單なる理想でありはしないかと疑つたものもないではなかつた。英米的な世界觀がそれほど深く、われわれの髓に喰ひ入つてゐたのである。

　しかしながら、大東亞戰爭の進むにつれて、われわれは道義的世界の建設こそ、わが日本の使命であり、人類の歴史の當然、必然的方向であることが解つたのである。ついで中華の具眼者も、タイもビルマもフィリツピンも、われわれと同じ理想を理想とするに至つた。今に印度四億の民衆も、われわれと同生共死の契を結ぶ日が來るであらう。

　われわれは米英が如何なる意味に於いて、日本の敵であり、アジア諸民族の敵であり、世界人道の敵であるかといふことが、誠にはつきりと解つて來たのである。決して決してふたゝび忘れたり、迷つたりすることのないやうな解り方で、はつきりと解つたのである。

　英米人並びに英米の思想は、實に永いあいだ人類の良心と正しき進路を掩ひ隱してゐた妖雲であつた。彼等の政治哲學や經濟學や、生物學や歴史は、實にわれわれの心眼を曇らせる詐術であつたのである。この恐しき呪咀は大東亞戰爭によつて見事に破られた。われわれは今や本然のアジア人の姿、日本人の心に歸ることが出來る。而して、御稜威に倚りたてまつつて、この惡の根源を芟除すべく、雄々しくも起ち上がつたのである。山本元帥やアツツ島に玉砕した勇士たちは、實にこの道義的世界建設の礎石となられたのである。

　天地が道義である如く人類世界も道義だ。慈悲、仁義こそ、人間の倚るべき永遠の道理である。今やわが帝國は、失はれた慈悲、仁義の世界を取り返へすべく戰つてゐるのである。そのために米英は徹底的に破碎せねばならない。この間一切の妥協を容れる餘地はないのだ。道義の世界を先づ東亞に打ち建てなければならない。この間一切の設計の代案も許さるべき性質のものではないのだ。

　神靈わが上にあり、人類の良心われと共にあり、われに勝ちあつて敗けはあり得ない。無理が永い間世に通つてゐたやうに見えたのは道理の力が顯現するためであつた。來るべき世界は道理の世界だ。道理とは皇道を指すのである。

　かゝる世界觀をはつきりと把握したわれわれには、もはや迷ひはない。われわれには唯安心立命があるだけだ。われわれは財の集積のために心を勞する必要もなく、わが身、わが子孫の將來のために憂慮するわけもない。教育勅語その他の詔書に炳乎として示されてある道に倚つて、己の分を守つて職域に勤めればいゝのである。もう個人主義や功利主義の世の中は、金輪際戻つて來ないのだから。君民一體の家族國家がいよいよ完成されるのだから。そしてアジアが、ついで全世界が、かゝる道義世界になるのだから。

　從來とても、職業に貴賤なしとか、勞働は神聖なりとかいふ理想は説かれたけれども、それが現實になつたのは、大東亞戰爭以來だと思ふ。そもそもわが日本は一君の下、四民平等であつて、その間差別のある道理のない國柄である。長幼の序や、尊卑の別や、軍隊や役所の如く、秩序のための階級は嚴守さるべきこともとよりであるが、それを他にしては、同じく大君の赤子である。士農工商、業は違つても、そこに貴賤はない。いづれも國力、戰力のための貴い奉公である。大將が軍神となれば、一兵卒も軍神と崇められるのである。田や畑の草を取る農夫も、山に炭を焼き、鑛石を堀るものも、机に向つて事務を取るものも、皆平等な、國のための御奉公であるといふことが、大東亞戰以來ひしひしとしみじみと日常生活を通してわれわれに感ぜられる。これほど驚くべき感激がまたとあるであらうか。誠に御民われ生けるしるしあり[[3]](#footnote-3)である。

　己を棄てることが佛教ばかりでなく、すべてのきよき教の主眼である。一舉一動が己一個人のためではなくて、それは大君のおんためであり、それが即ち八紘一宇の、人類最後の理想の顯現のためとなるといふことは何たる感激であらう。

價値の歸正

　英米思想は個人主義、功利的自由主義といふことばによつて説明されるならはしであるが、もう一つ貨幣主義、又は黄金主義といふべきであらう。從來とてもマンモニズムとか、拜金宗とかいふことばも往々使はれては來たが、誰でも自分も黄金を崇拜する心をもつてゐた時代なので、それが左程惡いことのやうには響かなかつた。

　高麗の或賢者が「人民、栗より銀を重んずれば道廢る」といふ意味のことを王様に申し上げて、人民が貨幣價値を重んずるやうになつた世相を戒めたことがあつた。われわれの先人たちは金銭のために動くことを無上の恥として居つた。ところがどうだつたか。大東亞戰爭直前まで、人々は金錢のために動いて居つたではないか。官吏や教職の人々でさへ、月給収入のためにその職に居ると思つてゐた者が多かつたではないか。事俸給に關係するとなると同盟罷業さへしかねまじかつたのは色色な勞働者階級ばかりではなかつた。しかもそれは正當なことゝ信じて居つたのである。これこそ英米主義の眞髓であり、ユダヤ主義の魔力であつたのだ。

　「黄金萬能」とは、よくいつたもので、金さへあれば何んでも出來た。何んでも買はれた。人間の良心までも買はれた。生命までも買はれた。だから黄金を獲得するのが、人間最上の目標で、忠も孝も考へる餘裕がなかつた。こんな世界こそ、現にわれわれが撃滅すべく戰ひつつある舊世界であるのだ。

　ありがたいことに、われわれは、この黄金宗の金縛から解かれた。われわれは人間の大事さ、物の大事さが、解つて來た。物價や勞賃の闇取引は嘆かはしきことに相違ないが、金よりも人間や物が尊ばれるやうになつたことは喜んでいゝと思ふ。

　今や農業も、工業もその本然のありかたに返つた。農業は國民の食糧を作ることであり、工業は國民の必需品や戰爭のためのものを造ることであるといふ建前に返つたのである。これは實に驚くべき轉囘で、從來は農業も工業も、その企業者の金錢的利潤が目的であつたのである。國のためになるとならぬとは、企業者の考慮の外にあつた。だから國に有害なものさへも、遠慮なく造り出されて、國民に害毒を及ぼしつゝ金を儲けては、ユダヤ的貴族に成り上つたものである。何といふ不合理なことであつたらう。今議會で定まつた企業整備の實施によつて、いよいよますます産業は皇道的本軌道に乗つて來ることゝ思ふ。生産も配給もすべて國家目的によつて統制されるのである。無駄はない。牛乳の風呂を焚いたり、米價吊上げのため、米を焼き拂つたりするやうな、恐しき罪惡は犯されなくなるだらう。米は食糧となり、牛乳は幼兒や病弱者の榮養たるの、本然の姿に返るのである。

　人間にしても同様だ。何の役にも立たない愚劣者の贅澤のために、直接は使用人として、間接には奢侈品や浪費物資の生産者として、あたらその尊き勞働力を犠牲にするやうな不合理はなくなる。人間や牛馬や機械の勞力はすべて、國家目的のために使はれねばならない。しかし過去に於いては、これを個人の利慾のために平氣で使つて居つた。一人の享樂者のために數人乃至幾十百人の勞力が、金づくでどうにでもなつたのである。何と勿體ないことであつたらう。

　陸も海も山も川も、その中の生なき物、生あるもの、すべては大君の物である。ましてや人間は大いなるも小さきも皆大御寶[[4]](#footnote-4)だ。この認識がはつきりして居れば、從來のやうな、愚劣な無駄使ひは出來なかつたはずであるが出來なかつたはずのものが出來たところに、今度のやうな大戰爭の原因があつたのだ。即ち英米的利己的個人自由主義の罪惡である。

　貨幣は一種の符牒であつて、それ自身價値ある物ではない。生命の糧となるのは仕事であつて、お金ではない。仕事をするのは人間であつて、お金ではない。たゞ國家が、人間勞力や物の價値を、便宜上、貨幣に採算する制度を設けたのである。ところが金融的魔術によつて、從たるべき貨幣が、反つて主たるべき人間に取つて代つて、人間を支配し始めたのであるが、かゝる不思議な仕組の元祖がユダヤ人で、その仕組によつて、暴利を収め　世界をわが物にしたのがアングロサクソンだといふのである。今、獨立のために死闘を續けてゐる印度も、この魔術で英の手に入つたし、危いところで、皇軍の手によつて滅亡より救はれた支那の四億が、英米の手に丸め込められたのも、この手が主であつた。米が今死物狂ひになつてゐる眞の動機は、世界の總量の大部分を藏してゐるところの、その黄金の力の喪失を恐れることにある。米は最後の足掻きとして、その黄金でスターリンや蔣介石を繰つてゐるのだ。そして、黄金あるが故に力ありの迷夢からいつ醒めるか解りはしない。

　金の敵に對して、わが日本は道義の力で闘つてゐる。滿洲や支那やタイやビルマや、比島や、インドネシヤや印度民族をわが陣營に引き入れたのは金の力ではない。それは純粋に道義の力である。アジヤ十億の民衆は、わが皇軍の至忠無垢なる姿によつて、わが日本の至純無雜なる道義性を看破し雙手を擧げて信倚して來たのである。アングロサクソンは支那人に金を呉れた、そしてその代償として支那人に奴隷たるべきを要求した。日本は支那人のために血を呉れた。そしてその代償として要求してゐるのは領土でも賠償でもなく、たゞ「共に大東亞を築かう」といふことである。これこそは最大の價値の歸正だ。領土や賠償よりも道徳に價値を置いたのである。金や權力は、人間の服從を買ふことが出來やう。しかし、金や權力で買はれた服從は強いられた服從であつて、金の切れ目が緣の切れ目となる。今般の戰爭にマライの諸民族の英に對して示したのは實にこの好適例だ。

　これに反して、道義で結ばれた信義は變るものでない。難局に處すれば處するほど、いよいよその力を發揮するものである。日本と東亞諸民族との結ばれが正にそれだ。日本は道義によつて、東亞諸民族の良心を擔つたのである。

　まだまだ、わが同胞の中にはユダヤ的、アングロ的個人主義拜金思想から抜け切らぬものがあるかも知れぬ。しかしそれは恰かも秋になつて、扇子を買ふやうなものだ。爽やかな秋風の中に扇子を持つて歩いたら、徒らに見る者の嗤笑を買ふことであらう。東亞の天地にふたゝび、個人主義や自由[主]義や拜金主義の日が歸つて來るものと妄想してゐるものがあるとすれば、彼は正に救はれぬ衆生である。　　　　　　　（舊名李光洙・作家）

1. 『緑旗』1943年8月号 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「大旆を翳す」は「たいはいをかざす」と読み、堂々たる旗を掲げる意。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 戦前の文部省唱歌「みたみわれ」の歌詞。万葉集から取られた。　 [↑](#footnote-ref-3)
4. 「おほみたから」と読み、天皇の人民の意。 [↑](#footnote-ref-4)